# 高齢女性における化粧を用いた情動活性化療法[1)]：心理的リハビリテーション・プログラムの枠組みづくりへ向けて

文京女子大学　人間学部

伊　波　和　恵

This series of studies aim at demonstrating the effectiveness of the use of cosmetics methods as mental rehabilitation on elderly women. Our hypothesis is that make-up application might heighten their self-esteem, and we attend to frame a cosmetical program for mental rehabilitation.

The participants were elderly women who stayed at the health care facilities for the aged in Kyoto City. Preliminarily, we research about their interests in cosmetics and beauty treatments at the past and the present on 60 elderly women. The findings of the pre-research was that 88% had been in the habit of making up at the past, and at the present, 35% had positive interests in some cosmetic treatments.

On the study1, we compared the Continuous group (C group, N=6),who received more than 8sessions of our cosmetic application, with the Discontinuous group (D group, N=7) about attitudes for cosmetic treatments and of participation in our sessions. Effects of cosmetic program were measured by several nonverbal indeces. The following results were obtained: 1) The C group showed the tendency of arousal by our sessions and it was more interested in cosmetic treatments than the D group. 2) The D group was sensitive at the mirror. 3) Taking results of pre-research into consideration, their cosmetical habits at the past was useful as an index of positive, continuous paticipation in the programs at the present.

On the study2, we compared two women as the case studies. One was an resident at the facility, and the other was an client of the day-care service there. These cases suggest that the client needs to the cosmetical program as the former, we needs to exmine the variety of methods furthermore.

## 1　緒　言

近年、老人福祉の領域において、QOL (Quality of Life) を高める目的で「お化粧」を園内レクリェーション活動に採用しているとの報告が、福祉介護誌などの媒体を通じて一般に広く紹介されている（例えば、『お達者で』1998 年秋号）。高齢者福祉・看護・保健領域の職員を対象とした自治体の介護講座において、回想法、あるいは音楽や絵画を用いた芸術療法と並んで、講習テーマに加えられていることもある（例えば、岐阜県ならびに青森県・介護実習普及センター主催の介護講座）。高齢者福祉の現場において、化粧をすることの心理的な効用については一般的な期待が寄せられ続け、福祉サービスの一環として、様々なかたちで高齢女性に提供されているようである。

このような背景としては、福祉サービスの利用者層が多様化し、特定の精神的老年性疾患のない高齢者の数が増すにつれ、従来の医療的･看護的･介護的サポート以外のサポート形態へのニーズが高まってきたと考えられる。また、老年期における精神的諸障害についても、医学的な、とりわけ薬理的なアプローチが確立しているとは言い難い現在、非薬物的アプローチの見直しと整備とが急務であることも指摘されており（須貝・竹中, 1995）、福祉現場においてもそのような現状に応えるべく、手探りの実践がそれぞれに進められているものと思われる。しかし、「化粧療法」、すなわち心理療法の一手法として化粧を適用するには、まだ至らない段階であるのも確かである。例えば、化粧へのニーズの把握、他者化粧の場合は施術者のスキルの検討と教育、効果測定法、さらに効果を得るための介入手法についての吟味などについては未だに不十分なままであり、ただ日常的な実感にもとづいた実践のみが散発的に試みられているのが現状であろう。

An Applicational Study of Emotional Activation Using Cosmetics Methods for Elderly Women at the Nursing Home: Toward Framing a Psychological Rehabilitation Program for Elderly

Kazue Inami

Bunkyo Women's University

この10年間にわたって、浜らは情動の活性化に関する一連の研究を通じ、臨床場面においては化粧と情動活性との関連に重点をおいて、その効果を検討することに取り組んでいる（浜・日比野・藤田，1990など）。この情動活性化療法とは、鬱病などの感情障害、老人性痴呆症といった心理臨床的に問題を抱える者に対して、彼らの情動に働きかけるような刺激（例えば、香り、映像、音楽）を用いることで、情動状態あるいは社会性における改善を図ることを目的とする療法的試みである（浜・日比野・藤田，1990；浅井・浜，1992；浅井・余語・浜，1992；浜・浅井，1993）。これらの情動活性化療法において、化粧を刺激として用いる利点には、次の事柄が挙げられる：１）女性の多くにとっては、プログラム導入にあたって、刺激が新奇すぎないので、心理的な違和感や抵抗感が比較的少ない、２）参加者の視覚、触覚、嗅覚など五官に訴える情動価が高く、かつ基本的には快刺激であると考えられる（伊波・浜，1994）、３）道具の入手および実施が比較的簡便であり、参加者、実施者双方への作業負担が軽い、４）実施した際、参加者本人にも周囲の者にも実施前後あるいは過程における変化が視覚的に明らかなので、フィードバックを得やすく、また、やりとりも生じやすくなる（伊波・浜，1994）、５）プログラム終結後、参加者にとって、自発的、日常的かつ習慣的に化粧を取り入れやすい（伊波・浜，1993）、６）研究者にとっては、直接効果（例えば、覚醒・自信・主観的満足感の上昇（余語・津田・浜・鈴木・互，1990；浜・浅井・余語，1991））および間接効果（例えば、社会性・積極性の促進（伊波・浜，1995））に関する操作性・観察性が高い。

このような一連の流れを汲み、老人保健施設における心理的なリハビリテーション・プログラムとしての化粧の有用性を検討することを目的として（伊波・浜，1996；伊波・浜，1997；伊波・浜・西野，1998）、本研究は、『化粧を用いた情動活性化療法（以下、化粧プログラムとする）』のプログラムおよびガイドラインを作成をめざしている（伊波，1996）。すなわち、入所者に対してはレクリェーションとして、通所者に対してはディケアのメニューのひとつとして、あるいは参加者のセルフケアを援助する精神的リハビリテーションの一手法として、提供可能な化粧プログラムの枠組みの作成を試みるものである。

そこで我々は、化粧を含む整容行動に関する高齢女性のニーズおよび、施設内での化粧プログラムへの参加状況について調査を行った。まず、言語的やりとりがある程度可能な高齢女性を対象に、継続的な化粧プログラム開始に先立ち、整容行動とその習慣に関する聞き取り調査を行った（予備調査）。第２に、化粧プログラムに継続して参加した者と初回で中断した者との差異に注目し、化粧場面において観察された行動上の特徴がみられるか否かを比較した。同時に、調査における化粧への印象、過去および現在での化粧習慣における差異と、実際の参加状況との関連について群間で比較した（研究１）。このように継続者群、非継続者群との差異を明らかにすることは、化粧を用いた情動活性化を施設の実情および入所者のニーズにより即した実際的な化粧プログラムを、提案し実施するうえで有意義であると考えられる（なお、予備調査および研究１の詳細については、中間報告および伊波・浜・西田（1998）において、すでに報告済みである）。最後に、老人保健施設における通所・入所それぞれの生活環境の差異をめぐって、事例的に概観し（研究２）、化粧行動の個別性について考察した。

## ２　予備調査

### ２．１　目　的

老人保健施設において、高齢女性の化粧行動に関するニーズと実状を把握する目的で、化粧行動および習慣に関する調査を行った。

### ２．２　方　法

#### ２．２．１　対象者

京都市内の老人保健施設・博寿苑を利用中の高

齢女性109名を対象とした（65～93歳、平均年齢82.3歳）。

### 2．2．2　調査実施

質問項目は、1）過去の化粧習慣、2）現在の化粧習慣・態度、3）整容に関するニーズ・イメージの3カテゴリーに分かれており、各カテゴリーにはそれぞれ3項目の質問が含まれていた（Table 1）。調査は、施設内において、化粧プログラム実施者の女性4名がそれぞれ個別に聞き取りを行った。

対象者の心身の健康状態は、ともに健常な者からどちらも良好とはいえない者までと様々であった。質問の意図について対象者が了解不能であった場合や、自分の名前を呼ばれたときに応えることができないなどの著しい認知障害が認められた場合は、本調査の対象から除外した。その結果、さらに回答が不十分であった者をも除いて、分析の対象者は60名となった。

### 2．2．3　結　果

過去および現在における化粧習慣の有無と、現在の化粧への関心について、対象者を入所・通所と施設の利用形態に分けて比較した結果をTable 2に示した。

全体の95％の者に過去に何らかの化粧経験があり、80％において化粧習慣が過去にあったことが報告された。現在の化粧習慣については58％に減少した。

入所者においては、入所中と在宅時・帰宅時とを比較した場合、有意な差ではないものの、在宅時の方がより化粧をすることが報告された（それぞれ、61％、72％）。これは、42％が自宅にいるときに化粧習慣があるとし、通所時には50％が化粧をするという通所者とは、一致しない傾向を示した。

Table 1　予備調査質問項目（概略）

過去の化粧（習慣）
- 1-1　これまでに、化粧をしたことがありますか？
- 1-2　化粧は、日常的にしていましたか？
- 1-3　化粧を止めたきっかけはありましたか？

現在の化粧（習慣）
- 2-1　現在、何か顔のお手入れはしていますか？
- 2-2　自宅にいるときには、どうですか？
- 2-3　自分の鏡（台）をもっていますか？　それを見ることはありますか？
  鏡を見たときに、何か思うようなことはありますか？

化粧に関するニーズとイメージ
- 3-1　化粧や顔のお手入れをしたいと思うことはありますか？
- 3-2　化粧や顔のお手入れをしてもらいたいと思うことはありますか？
- 3-3　化粧（をする）というと、どんな印象をもちますか？

Table 2　過去・現在の化粧習慣の有無と、現在の化粧への関心

| | | 入所者 | | 通所者 | | 計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 回答人数（人） | 36 | | 24 | | 60 | |
| | 平均年齢（歳） | 81.5 | | 80.9 | | 81.20 | |
| 過去 | 化粧経験有 | 35 | 97％ | 21 | 88％ | 57 | 95％ |
| | 化粧習慣無 | 30 | 83％ | 17 | 71％ | 48 | 80％ |
| 現在 | 化粧習慣有 | 22 | 61％ | 12 | 50％ | 35 | 58％ |
| | 化粧習慣有（在宅） | 26 | 72％ | 10 | 42％ | 37 | 61％ |
| 関心 | 化粧への関心 | 10 | 28％ | 11 | 46％ | 21 | 35％ |
| | 消極的な関心 | 6 | 17％ | 8 | 33％ | 14 | 24％ |

さらに、整容および化粧への関心について、自分で化粧をしたいと望む場合を積極的な関心があるとし、人にしてもらうのならしたいと望む場合を消極的な関心があるとみなすと、全体の35％にあたる21人が化粧への積極的な関心を示した。とりわけ、通所者において、化粧および整容への興味について言及する者が46％、消極的ながら関心があるとする者が33％と、より関心を寄せる傾向がみられた。

#### 2.2.4　考　察

過去および現在における化粧習慣の有無と、現在の化粧への関心に関する予備調査において、対象者の80％に、かつては化粧習慣があったことが確認された。しかし、過去のある時点において化粧を止め、今では化粧習慣はないと報告する者は多く、現在でも化粧習慣はあるとしながらも使用品目としては基礎化粧のみの者が多くを占めていた。

また､施設内では化粧習慣がないとしながらも、自宅では化粧をするという者がわずかながら多いことは、入所者において特徴的であった。通所者では逆の傾向が示されたことは興味深いが、これは、入所者にとって施設内において目立つまいとする意識が化粧行動を抑制している可能性が示唆された。同時に、通所者にとっては、施設へ通うことはすなわち余所へ行くことにほかならないので、あえて装いに気を配るという行動に繋がっている可能性があった。これは、施設をウチとみなすかヨソとみなすかという点において、入所者と通所者の間では施設という場の捉え方が逆転しているとも考えられた。

さらに、化粧への関心については、３人に１人が積極的関心を寄せていることが明らかとなった。とりわけ、通所者においては化粧品ブランドへの関心、整髪への希望など、多岐にわたる整容行動への言及が認められた。これらの、通所者の化粧行動への意欲の高さが示されたことは、彼女らの方が比較的、化粧や整容に関する情報を得やすい生活環境にあることと関連しているのかもしれない。

このように、過去と現在の化粧習慣およびニーズが示されたとともに、施設利用形態の違いによって、化粧への態度および関心が変わりうることも示唆された。

## ３　研究１

### ３.１　目　的

老人保健施設・博寿苑で実施した化粧プログラムにおいて、継続して参加した者と、継続して参加しなかった者との差異に注目した。さらに、予備調査に示された化粧習慣性と実際の参加状況との関連について、両群を比較した。

### ３.２　方　法

#### ３.２.１　参加者

予備調査対象者において分析の対象となった60名のうち、完全回答が得られ、かつ通所日、入所期間などの外的条件が整っていると認められた33名に対してプログラムへの参加呼びかけを行ったところ、20名から参加への意思が認められた（65～92歳、81.3歳）。このうち、１回のみの参加者は８名であり、２～７回参加者は５名、８回以上継続した参加者は７名であった。そこで、本研究においては、１回のみ参加者を非継続群とし、８回以上参加した者を継続群とした。両群から、欠損値の多い者を１名ずつ除外して、非継続群７名、継続群６名を群間比較の対象とした。

#### ３.２.２　実験室および装置

実験室は化粧室とモニター室の２室で構成されていた。化粧室内では、ワンサイドミラーである三面鏡の裏のVTRカメラを写して、入室時から退室時までの参加者の行動を常時モニターした。口紅立ては鏡台の上に、布製の覆いをかけ、口紅選択場面までは参加者の目に触れないような状態で置いた。呈示する口紅（deuxseize,

KOSE）は39色用意した。

### 3．2．3　手続き

実験は週1回の頻度で行なわれた。1回毎の所要時間は15分程度で、そのうち化粧に要した時間は約10分であった。化粧プログラムは、次のような手順で進められた。

化粧水、乳液、化粧下地を順に用いて基礎化粧（段階1）を施した後、必要に応じてコンシーラーを用い、続いてファンデーション、フェイスパウダー、眉墨を付けた（段階2）。さらに、布覆いを外して口紅立てを呈示するとともに、付けてみたい色を選ぶように教示し（口紅選択場面）、最後に頬紅をつけて化粧を仕上げたのち（段階3）、参加者に手鏡を手渡して見せた。

化粧前後には音声を録音するために「あいうえお」と書いた紙を呈示し、それを読むように教示した。また、化粧前後に30秒間、参加者を1人にする時間を設け、実験者がいない状況での行動をも観察した（実験者不在場面）。

### 3．2．4　測　度

実験室内での行動測度としては、次の7項目を用いた。

リラックス（脱活性）および快感情の指標として⑴閉眼時間、⑵微笑時間、覚醒および興味の指標として⑶1分あたりの瞬目回数、自意識の指標として⑷鏡注視時間、⑸整容行為時間、⑹選択された口紅の色の種類、社会性の指標として⑺発話時間および⑵。

## 3．3　結　果

### 3．3．1　予備調査と群間比較

予備調査における質問項目と群間を、Uテストを用いて比較した結果、『過去の化粧習慣』の項目で有意差が認められた（$U = 9.00$, $df = 6, 7$, $p < .05$）。すなわち、継続群では全員が、かつては日常的な化粧習慣があったとする一方で、非継続群では、化粧が習慣化していた経験はないという者も含まれていた。

### 3．3．2　化粧場面（初回時）における行動上の群間比較

1分あたりの瞬目回数を化粧過程別にみたとき、WilcoxonのTテストの結果、継続群では化粧段階1・2より段階3において瞬目が増える傾向がみられた（$T = 4.00$, $df = 6$, $p < .10$）。また、化粧前後30秒間の瞬目回数について、継続群においては化粧後に増加した（$T = 0.00$, $df = 6$, $p < .05$）。

化粧前後30秒間の鏡注視時間については、化粧前後ともに非継続群の方が鏡注視時間は長かった（$U = 9.00$, $df = 6, 7$, $p < .05$；$U = 11.50$, $df = 6, 7$, $p < .10$）。整容行為時間についての化粧前後30秒間における比較では、化粧前では非継続群の方が長かったが、化粧後では継続群の方が長い傾向がみられた（$U = 9.00$, $df = 6, 7$, $p < .05$；$U = 11.50$, $df = 6, 7$, $p < .10$）。

口紅選択場面において、継続群では全員が口紅を選択して用いたが、一方、非継続群では口紅施術を拒否する者もいた（57.1％が選択）。

## 3．4　考　察

第1に、予備調査との関連から、『過去の化粧習慣』が化粧プログラムへの参加継続性と関連することが示唆された。第2に、継続群および非継続群間の初回時の行動を比較して、継続群は非継続群に対して、化粧中、後半における瞬目の増加、化粧後の瞬目の増加が認められることが示唆された。このことは、継続群において、化粧をすることで覚醒感が高まる可能性が示されたものと考えられた。一方、非継続群では、化粧前後での鏡注視時間が長いことや化粧前に整容行為時間が長いことから、非継続群の方が鏡に対して「過敏である」可能性が示唆された。しかし、ネガティブな反応が顕著であったかどうかについては未検討であり、行動の質にまで踏み込んで見極める必要があると考えられる。また継続群では、口

紅選択場面において拒否する者が皆無であったこと、化粧後に整容行為時間が延長したことから、継続して参加する者は、化粧による自分自身の容姿の変化に関して、より関心が高いという可能性が示唆された。

これらのことから、化粧プログラムに先だって予備調査を行う際には、現在のニーズを把握するだけでなく、過去の化粧習慣をもあわせて問うことによって、プログラムへの向き不向きがより明確に予測しうると考えられた。また、プログラム導入後も、化粧品（とくに口紅）への抵抗の有無は、参加の継続性を予測する目安となると思われた。

過去の化粧習慣および現在のニーズを踏まえて化粧プログラムを適用することは、参加者に対して無理強いをしないという意味でも、参加へのモチベーションを高めるであろう。同時に、参加にまつわる負担感を軽減することで、参加者たちの満足および自信をより増すことができるとも期待しうる。

## 4　研究２

### 4．1　目　的

老人保健施設における通所・入所それぞれの生活環境の差異をめぐって、化粧行動の個別性について検討した。

### 4．2　方　法

#### 4．2．1　対象者

老人保健施設における化粧プログラム参加者のうち、10回以上継続した者から、通所・入所それぞれ１名ずつを本報告の対象とした。

#### 4．2．2　装置・手続きおよび測度

研究１（3．2．2～4）と同様であった。

#### 4．2．3　事　例

①入所者Ｉ

92歳の女性で、老年性痴呆と診断されていた。おもに短期記憶面での問題が認められており、また独立歩行には杖を要したが、ADL面においては自立していた。施設内では、色鉛筆を用いた描画や手芸を好み、１人で穏やかに過ごしていることが多いようであった。参加中の生活上の変化としては、中盤、第12セッションの前に２人部屋から４人部屋へと部屋替えがあり、化粧セッションも２週間あけて再開した。プログラムへの参加前、化粧への関心は高かった。長年、「身だしなみ」としての化粧が習慣化されていたものの、入所を機にメーキャップを中断していた。

**微笑時間・発話時間**　いずれの指標においても１セッション目で最長であり、12、13セッションで最低値をとった。セッションを通じてほぼ同一の増減傾向を示した（Fig. 1）。発話内容としては、セッション前半においては、日常的な手入れができるように化粧品を購入したいという訴えや、そのことについて家人が応えてくれないという不満が述べられた。

**口紅選択場面**　口紅の色の選好は色味の薄いピンク系のものが中心であり、一定していた。選択時間も４セッションまでは20秒以上要していたものが、５セッション以降は短時間で決定された。化粧後、30秒間１人で化粧室に残される場面では、口紅を指で拭い、つけた色を若干落とす行動がしばしば認められた。13セッション目においては、口紅および頬紅を強く拒否した。

②通所者Ｎ

83歳の女性で、軽度の老年性痴呆と診断され

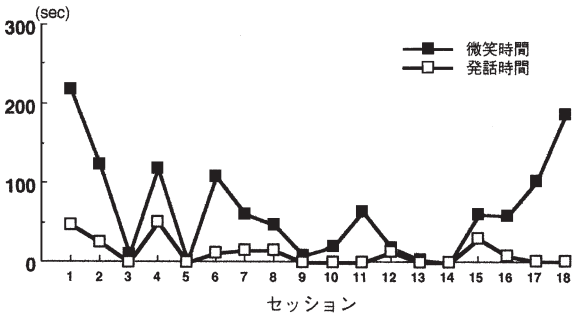


Fig. 1　入所者Ｉの微笑時間および発話時間

ていた。身体的には健康で、ADLは正常であった。日常会話上の支障はないが、その内容は乏しく、知的面では介助を要するとみなされていた。明朗快活な人柄であり、誰とでも親しげに打ち解けて話すことはできるのであるが、社交的なやりとりに終始する傾向にあった。施設においては、社会的孤立感の軽減を目的として、週１回ディケア・サービスを利用中であった。化粧への関心は高く、自宅から化粧をして来ることがあった。

**鏡注視時間**　セッションが進むにつれ、鏡を注視する時間が増加しており（Fig. 2）、またセッション中、化粧が進行するつれて長くなった。

**身体接触時間**　セッションを重ねるほどに自分に触れる時間が長くなった（Fig. 2）。行動内容としては、髪を直す、衣服を整える、という頻出する行為ばかりでなく、化粧道具を手にとり自ら化粧をするものが含まれた。これらは、口紅を上から塗りなおす、アイシャドウをいれる、口紅を耳たぶに塗ってみる、などの「色を付ける」行為であった。

**口紅選択場面**　決定までの時間にはばらつきがあり、一定の傾向は認められなかった。選好された色はピンク系が中心であり、ローズ系も含まれていた。しかし、自分で１色選ぶのを避けようとする態度がみられ、化粧施術者に決定を委ねることが多かったため、彼女の本来の選好が反映されていたかどうかは疑わしかった。

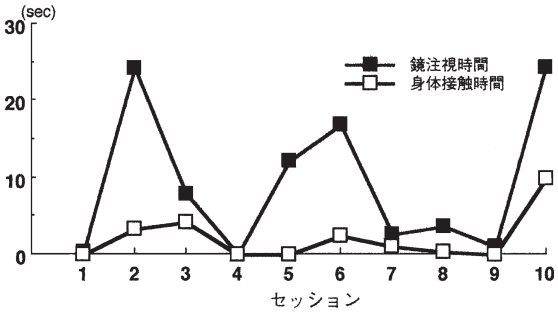


Fig. 2　所者Ｎの鏡注視時間および身体接触時間

## ４．４　考　察

研究２においては、老人保健施設のサービス利用形態によって、化粧プログラムへの参加態度が異なるのか否かについて事例的に検討した。その結果、情動活性や自意識の改善という点においては、入所者よりもむしろ通所者についてより顕著な効果が認められることが判った。従来、施設入所者に対するサービスとしてのみ行われてきた化粧プログラムではあるが、通所者に対してもより積極的に提供されてしかるべきであると考えられた。ただし、通所者Ｎに認められたような、口紅を瞼のうえにつけるなど、必ずしも社会的に適当でない衒奇的な化粧行為への対処については、今後、議論の余地があると思われる。それは社会的適応性の文脈から離れる一方で、化粧の別の機能的側面、変身願望の充足および祝祭性の表現を意味すると考えられるからである。

一方で、通所者の反応の顕著さに対して、施設入所者の刺激への反応性の鈍さが懸念される結果ともなった。一般に施設入所者は、通所者よりも高齢であり、また身体的機能、知的機能面における衰えが認められる者も少なくない。結果には、環境の特徴というよりもむしろ、このような状態的特徴がそのまま反映されたということも考えられた。しかし入所者については、施設内の生活にあってさらに感情鈍麻を進行させないための「情動面でのリハビリテーション」を意識したプログラム作成も必要であることが示唆された。

化粧が、女性の精神状態を把握するための適当な外的指標であることは、精神科医も指摘している。経験と観察にもとづいて、気分の浮き沈みの指標であるとともに、化粧の再開や開始を、一般的に積極的で好ましいセルフイメージを支持する行為であるとみなすなど（小西，1991）、女性患者の病状回復の目安としている医師も少なくはない。

緒言において論じたように、心理的リハビリテーションの手法として、化粧および整容を積極的に活用するにあたっては、それぞれの心理的な意

味づけについて、いまだ議論不足な点があることも否めない。療法的アプリケーションを意図する際、例えば行動療法のように、プログラムの実施によって特定の効果が得られるように操作するなど、一定の方向性を定めることも大切である。また、すでに枠組みが定まりつつある心理的リハビリテーションの手法（例えば、回想法；野村(1998)）を踏まえて、手法的な検討を進める一方で、再度、基礎的な資料をみなおし、心理的な理論的整備を図る必要もあると考えられる。

今後の展望としては、施設や家庭において、介護者の負担なく、化粧および整容に関するプログラムを日常的かつ効果的に取り入れる方法について、さらに検討を進める必要があると考えられる。また、個人のみならず集団への適用も視野に入れるなど、サービス形態の多様化に応えうるよう、枠組みに柔軟性をもたせていくことも必要となるであろう。

## 謝　辞

化粧プログラムの実施にあたっては、医療法人行陵会 老人保健施設・博寿苑の苑長、遠山光郎先生をはじめとする、施設職員および病院所属の作業療法士の方々に多大なるご尽力をいただいたほか、参加者の方々には、プログラムへご協力いただいたうえ、貴重なご意見とデータとを頂戴した。また、同志社大学文学部心理学専攻卒業生の北田育子氏、花岡恭子氏、長江美奈氏ならびに西田真弓氏とはデータを共有した。諸氏のご理解とお力添えに、心より感謝申しあげる。

なお、研究に用いた化粧品のうち口紅一式（deuxseize, KOSE）は、1993年に㈶コスメトロジー研究振興財団よりご寄贈いただいたものである。関係諸氏、とりわけ、宮川安正氏のお力添えとご厚意に深く感謝申しあげる。

1）本研究は、筆者の共同研究者であり指導教官である浜　治世（文京女子大学教授；同志社大学名誉教授）が中心となって進めている、情動活性化療法の試みの一部である。

## 引用文献

1）浅井　泉・浜　治世　1992　老人性痴呆の情動活性化の試み：化粧を一つの手段として　日本健康心理学会第５回大会発表論文集，40-41.

2）浅井　泉・余語　優美・浜　治世　1992　老人性痴呆の情動活性化の試み　日本心理学会第56回大会発表論文集，662.

3）浜　治世・浅井　泉　1993　メーキャップの臨床心理学への適用　資生堂ビューティーサイエンス研究所（編）　化粧心理学　フレグランスジャーナル社　Pp. 346-358.

4）浜　治世・浅井　泉・余語真夫　1991　化粧による情動活性の試み　日本健康心理学会第４回大会発表論文集，84-85.

5）浜　治世・日比野英子・藤田祐子　1990　化粧による情動活性化の試み　日本心理学会第54回大会発表論文集，714.

6）保健同人社　1998　きれいになって、心も体もイキイキしませんか　お達者で　秋号，3.

7）伊波和恵・浜　治世　1993　老年期痴呆症者における情動活性化の試み　健康心理学研究，6，29-38.

8）伊波和恵・浜　治世　1994　化粧を用いた情動活性化の試み　日本感情心理学会第２回大会発表要旨，36.

9）伊波和恵・浜　治世　1995　化粧を用いた情動活性化の試み（２）　日本感情心理学会第３回大会発表要旨，35.

10）伊波和恵・浜　治世　1996　化粧を用いた情動活性化の試み（３）　日本感情心理学会第４回大会発表要旨，31.

11）伊波和恵　1996　化粧と社会的適応　高木　修（監修）　大坊郁夫・神山　進（編）　被服と化粧の社会心理学　Pp. 178-196.

12）伊波和恵・浜　治世　1997　化粧を用いた情動活性化の試み（４）　日本感情心理学会第５回大会発表要旨.

13）伊波和恵・浜　治世・西田真弓　1998　高齢女性における化粧を用いた情動活性化の試み：

過去の化粧習慣と化粧プログラムにみられる参加継続性との関連　文京女子大学紀要（人間学部），2，81-92.
14）伊波和恵・浜　治世・西野泰広　1998　化粧を用いた情動活性化の試み（5）　日本感情心理学会第6回大会発表要旨，（印刷中）.
15）小西聖子　1991　黄色いアイシャドウ　imago, 2(4), 95-101.
16）野村豊子　1998　回想法とライフレヴュー：その理論と技法　中央法規出版.
17）須貝佑一・竹中星郎　1995　痴呆症精神疾患の非薬物的アプローチの臨床的意義と適応　老年精神医学雑誌，6(12), 1471-1475.
18）余語真夫・津田兼六・浜　治世・鈴木ゆかり・互　恵子　1990　女性の精神的健康に与える化粧の効用　健康心理学研究，3, 28-32.